

『坑夫』論

相原和邦

『坑夫』は、人物設定において、『虞美人草』とは異なった様相を見せている。『虞美人草』では、主要人物に絞っても、甲野、宗近、小野という男たち、藤尾、小夜子、糸子という女たちが、それぞれ対照的な役割を担って、張り合っていた。これに対して、『坑夫』においては、東京の「相当の地位を有つたものゝ子である」境遇を「逃亡」し、ボン引きにつかまって鉦山に送り込まれる一人の男の回想に終始している。

ところで、『坑夫』には、明らかな素材がある。すなわち、漱石のところへ売り込みに来た荒井某の体験を下敷きとしており、その聞き書きメモも遺されている。このメモと作品を比較すると、その筋書が酷似している。部分的な順序の入れ替えや省略もないが、総体としてはむしろ一致点の大きいのに驚かされるのである。

とはいえ、このことは、作者のオリジナリティの稀薄さに直結するものではない。作者は、この作品の成立直後、『坑夫』の作意と自然派伝奇派の交渉」と題する談話において、つぎのように語っている。

あの書方で行くと、ある仕事をやる動機とか、所作なぞの解剖がよく出来る。元来この動機モチヰの解剖といふ奴は非常に複雑で、我々の気付かん所が多くある。これを真に事実として写せば極く／＼煩瑣なものであつて殆ど書現はせない。よし現はせても煩に堪へぬ不得要領のものとなつて了ふ。面白くない故かも知らんが、ある意味から云へば、かゝる方面の事は余り多くの人がやつて居らん。のを、私は却て夫が書いて見たい——細かくやつて見度い。といふ念があるから、事件の進行に興味を持つよりも、事件其物の真相を露出する。甲なる事と、乙なる事と、丙なる事とが寄つて、斯うなつたと云ふ風な所に主として興味をもつて書く。

(「文章世界」明四一・四)

ここでは、「動機の解剖」が主眼とされている。「脈絡貫通した一個の事件」が

あつたとしても、その「原因結果」の連鎖、つまりストーリーを追うのではなく、「事件中の一箇の真相」に「徘徊」して、それを構成する複数の「動機」を「分析的」に追求するのだという。こうすれば、「昔の事を批評しながら書ける」「回顧」の視点と相俟って、「智力上の好奇心を満足せしめ」ることができるといふのである。

要するに、「筋」そのものは基本的に素材メモと合致しているとしても、「動機の解剖」という心理分析は、メモにも荒井某の話にもなかつた作家の創造部分である。この分析記述に用いられる「自然」「天」「運命」等の絶対概念も、また、メモには見られず、作家が新たに付加したものである。これらの用語に即しながら、主人公の心理分析を追跡していくことには十分の意味があらう。

「天」という語に関しては、この作品には総じて重い用法は見られない。

たとえば、人の顔さえ見れば声をかけて坑夫に誘い込もうとするボン引の長藏を「自分でなくつちや御前ゴマエさんをやり得る人間は天下広しと雖も二人と有るまい」と云ふ程の平気な顔で、やつてゐる」(傍点原文)という叙述があるが、これは強調した形容以上には出ていない。のみならず、同じ箇所で「長藏さんだつて、天性御前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい」という用法もある。「天性」は、むしろ否定的に用いられているのである。この長藏は、また、「赤毛布と小僧」に対して、「頭から此の両人は過去の因果で、坑夫になつて、銅山のうちに天命を終るべきものと認定してゐる様な気色があり／＼と見えた」という対応をする。「天命」と「因果」の語との結びつきは一応注目される。けれども、この場合も一般的な用法にとどまっている。「天功を奪ふ様な御世辞使は未だ曾て見た事がない」といふ言いまわしも同様である。「天」の尊重はうかがわれる

が、一通りの比喩にすぎない。要するに、主人公以外の人物に付随して用いられたこれらの語は、他の語と熟合して、「天」のみが独立して使用されるといふことはない。内質としても、独自の重量を担った用例は見出し難いのである。

事情は、主人公に關しても、大同小異である。

ただ、主人公の場合には、「天」が単独で使われている例がある。「没自我の坑夫行」の覚悟に加えて長藏に闇の中を歩き通しに歩かされた主人公は、心に全く「宿泊の件を請求してゐなかつた」。そこへ、突然「泊つて行かう」と言い渡される。

所へ泊ると命令が天から逆に魂に下つたんで、魂は一寸まごついたかたちで、取り敢ず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しがつたから、魂も成程難有いと、始めて長藏さんの好意を感謝した。

「疲勞」し切つた身体に予期せぬ休息を許されたとき、それを天手のものと感じたという心情は理解できる。とはいへ、誇張された比喩というほかには「天」の語に格別の意義は認められない。事実として、この後には「何となく落語してみて巫山戯てゐる」「臂」だという断わり書きが加えられている。半ば冗談口であることを語り手自身自覚しているのである。

「人の居ない所にあて、尤も死に近い状態で作業が出来れば」と念じた主人公は、「自分程坑夫に適したものは決してないに違いない」と判断する。「坑夫は自分に取つて天職である。——と茲所迄明瞭には無論考へなかつたが、只坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持ちがして、其の陰気が又何となく嬉しかつた」。ここでは、いったん「天職」の語が提示されながら、結局、そこに至らぬものとして否定されている。茶化しめいた軽い用法である。この主人公が鉾山に辿り着き、いよいよ飯場頭と交渉する段になると「自分はどうかあつても坑夫になるべき運命、否天職を帯びてゐる様な気がし出した」という叙述となる。「天職」の語は、茶化してはなく、肯定的な意味で用いられている。とはいへ、それは一皮めくれば、「此の山と此の雲と此の雨を凌いで来たからには、是非共坑夫にならなければ済まない」という便宜的、一時的な感情に駆られてのものである。『草枕』の冒頭においてこの語は、「こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに画家といふ使命が降る」と真正面から打ち出され、『野分』の結び近くで「動くべき社会をわが力にて動かすが道也先生の天職である」と誇示されていた。『坑夫』における「天職」の語は『草枕』『野分』ほどの正当性も重量も付与されていないといわざるを得ない。

後半部で、主人公は死への傾斜をふり切つて、坑道の梯子を登る。「それから先は殆ど夢中だ。自分で登つたのか、天佑で登つたのか殆ど判然しない」。ここでも、「天」の力が意識されている。しかし、それは「自分」の力と併置される程度のものである。

この作品に用いられた「天」の概念は、絶対的な力を發揮しているとは言えない。

二

これに対して、「自然」という語は重要である。

もっとも、この語について軽い用法がないわけではない。「然し昨夜の一から十迄が自然と延びて今日迄持ち越したとは受け取れない」「ゆるめかけた手が自然と緊つた」などがそれで、これは一般的な形容句である。「此の時自分の失敗に対する冷評は、自然の儘にして抛つて置いたなら、何処まで続いたか分らない」「さう云ふ状態で壁へ倚りかゝつてゐると、其の状態がなだらかに進行するから、自然の勢ひとして段々気が遠くなる」などもこの範疇を出していない。

「然し此の答は前の様に自然天然には出なかつた」「劇しい労役の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、たゞ天然自然に年を取つたつて、あゝなるもんぢやない」という二例は、幾分趣を異にするともいえる。前者は、仕事の本身も分らないのに「遣るなら話すが、遣るだらうね、お前さん」と強く念押しされて、止むなく「遣る氣です」と応じた時の答えかたであり、後者は、「肉と云ふ肉がみんな退却して、骨と云ふ骨が悉く呐喊展開」している「純然たる坑夫の顔」の形容である。どちらも、強調していえば、人間の自然状態に背くものである。

「天然」の語が付加されているのも、意味を強めている。とはいへ、文庫本のテキストに「天然」の語を省いた例もあるように、なお、これは「自然に」という一般的用法の延長線上にあつて、それが強められたものと受け止めることも不可能ではないが、つぎの例はより意識的だといえよう。

睡眠は是程の効驗もあるまいが、其代り生き戻り損ふ危険も伴つてゐないから、心配のあるもの、煩悶の多いもの、苦痛に堪へぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取つては、至大なる自然の資である。其の自然の資が偶然にも今自分の頭の上に落ちて来た。

意図的に「絶息」した後「活を入れさせる」例との対比で、睡眠の効用が述べら

れている。「二十世紀に睡眠が必要」という句は、すでに「草枕」に見えていた。この主人公は、「何の為に歩いて居るんだか分らなくって、しかも歩かなくって一刻も生きて居られない程の苦痛」に追い立てられて居る。しかも、行手には「自滅の一着」として鉾山に自らを生埋めにする目標以外には何も無い。こういう主人公にとって、すべての自覚は「煩悶」と「苦痛」である。ところが、睡眠は「生きてゐる以上は是非其の経過を自覚しなければならぬ時間」を、丸潰しに潰して「くれる」。「自然」に背く「坑夫行」の只中においてなお「自然」はこのような慰藉を与える。「自然の資」という語が二度も繰り返されるのもうなずけよう。

一層注目されるのは、「自然」がこの作品の中心思想と密接な関わりを持っている事実である。

この作品の基調をなすのは、著名な無性格論である。近頃ではてんで性格なんてものはないものだと考へて居る。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな性格をこしらへると云つて得意がつてゐる。

読者もあの性格がかうだの、あゝだのと分つた様な事を云つてゐるが、ありや、みんな嘘をかいて楽しんだり、嘘を読んで嬉しがつてゐるんだらう。本当の事を云ふと性格なんて纏つたものはありやしない。本当の事が小説家杯にかけられるものぢやなし、書いたつて、小説になる気づかひはあるまい。本当の人間は妙に纏めにくいものだ。神さまでも手古ずる位纏まらない物体だ。

「本当の人間」は「矛盾」のかたまりである。「性格なんて纏つたものは」現実にはありえない。この理論は、つぎのようにも説明される。

昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人間はかう出来てゐるんだから致し方がない。

無性格ということ、人間が絶えず変化するところからも来る。したがつて、時間的に、「昔」と「今」が正反対の状態であっても驚くにあたらない。むしろ「天然自然の状態である」と断言するわけである。つぎの引用も同様の趣旨である。

自分は当時種々の状況で、万事長藏さんの云ふ通りはいく云つてゐたし、又そのはいくを自然と思ひもするが、其の代り、今の様な身分に居るからは、たとひ百の長藏さんが、七日七晩引つ張りつゞけに引つ張つたつて一寸も動きやしない。今の自分には此の方が自然だからである。さうしてかう変るのが人間たる所だと思つてゐる。分り易い様に長藏さんを引合に出した方が、よく調べて見ると、人間の性格は一時間毎に變つてゐる。

「昔」と「今」の対照どころではない。つきつめると「人間の性格は一時間毎に變」る。つまりは、無性格ということに帰着する。先に「人間はかう出来てゐるんだから致し方がない」というつけ足しがあり、いまの引用にも「かう變るのが人間たる所だ」という念押しがある。小説的展開よりも人間無性格の主張が前面に出て来ているのがこの作品なのだが、その主張には「自然」の理念が深く浸透しているのである。

三

「坑夫」においては「運命」という語も無視できない。

作品の前半部で、「自分は十九年来始めて」朝食抜きの出立を「当り前と考へる」輩と同行することになる。

赤毛布と小僧の顔色を伺つて見ると少しも朝飯を予期してゐる様子がないんで、双方共朝飯を食ひ慣けてゐない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう坑夫以下に摺り落ちてゐたと云ふ事が分つた。然し分つたと云ふ許りで別に悲しくもなかつた。

「顔も洗はず、飯も食はず」に旅立つ彼等。「始めて」の体験とはいへ、自分も全く同じことをした以上「赤毛布は即ち自分である」。坑夫に身を捨てて決心をし、底辺の人間たちと行動を共にした時から、自分の運命の軌跡が彷彿としてくる。下降志向と「運命」の認識とが結びついてくるのである。

結末近くで、主人公は、鉾山の葬式である「ジャンボ」を見、病院の「薬の臭」を嗅ぐ。

此の臭を嗅ぐと等しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んで此処の土になつたら不思議なものだ。かう云ふのを運命といふんだらう。運命の二字は昔から知つてたが、たゞ字を知つてゐる丈で意味は分つても、納得が六づかしかつた。西洋人が箱を想像する様に定義を心得て満足してゐた。けれども人間の一大事たる死と云ふ實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでゐるシキとを結び付けて、二三日前途不足なく生ひ立つた坊つちやんを突然宙に釣るして、此の二つの間に置いたとすると、坊つちやんは始めて成程と首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云ふ事が分かる。

「中以上の家庭に生れ」て「申し分のない坊つちやん」であつた自分。「二三日

「前迄」は思いもよらなかつた「シキ」の生活。懸隔のはなはだしいこの二つが、いま結び合っていることの「夢の様な不思議」さ。「運命」という語の本當の意味が否応なく「自分」の認識に食い込んで来る。その「魔力」で「弄」ばれていくという受け止め方も、あながちに誇張とはいへぬ。

さらに、坑夫になるための健康診断に來た主人公は、この病院で気管支炎と診断される。もはや、坑夫になる道すら鎖される。しかも、「気管支炎と云へば肺病の地下で」、「肺病になれば助かり様がない」。

どうでも構はないから、どうとも勝手にするがい、自分が懐手をしてゐたら運命が何とか始末をつけて呉れるだらう。死んでもいい、生きてもいい。華敵の瀑杯行くのは面倒になつた。東京へ帰る？何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳をせくうちの命だ。此処迄運命が吹き付けて呉れたもんだから、運命に吹き払はれる迄は、此処にゐるのが、一番骨が折れなかつて、一番便利で、一番順当な訳だ。此処に居て、たと墮落の修業さへすれば、死ぬ迄は持てるだらう。

「運命」の意味を認識した直後に、決定的な「運命」を觀念せざるを得なくなる。「運命」の語が多用されるのは、當然である。その認識が「墮落」と結合しているのも、はじめに確かめた下降志向と呼応している。

とはいえ、深刻な認識に到達しながら、「自分が懐手をしてゐたら運命が何とか始末をつけて呉れるだらう」と、傍観的で投げやりなのはなぜだらうか。

先ずは、死との距離が考えられる。主人公は、作品のはじめの方で、「ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責めての慰藉と心得る様になるが」「但し目指す死は必ず遠方になければならない」という哲理を看破していた。ここで、気管支炎が死への一つの導火線になるにしても、その死が目前に迫っているわけではない。この距離が無意識のうちにも一種の余裕をたらしているのであらう。水浸しの坑内で「こいつは死ぬぞ」と自覚した時には、「すぐに統いて、死んちや大変だと云ふ考へが躍り出した。自分は同時に、くちくちと眼を開いた」と叙述されている。いまは、それほど切迫感がないのである。

つぎには、主人公が「運命」に抵抗し、働きかけようとする意志を欠いていることである。彼は、はじめから、「自滅」と「墮落」以外には積極的な生の目的を持っていない。したがって状況に対する主体的な関わりを一切喪失することになる。ポン引きの長職に声を掛けられて以来、彼のいうまま「偶然」の導くままに鉱山にやってきたのもそのせいである。

このような心境の特色は、作中で別の角度からも、繰り返して照らし出されている。たとえば、「自分」は長職について「大きな宿」に降り立ち「一本筋の通り」を見る。その心中は「此の真直な道、此の真直な軒を、事実等に等しい明かな夢と見たのである。此の世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴ふ爽涼した快感を以て、他界の幻影に接したと同様の心持になつた」と記されている。この時「明瞭な此景色」を視覚に入れつつ、なお「自分の魂は二日酔の体たらくで、何処迄もとろんとしていた」という。ここには「自分の魂がおやと思つて、本気に此の外界に對ひ出したが最後、いくら明かでも、いくら暢びりしてゐても、全く実世界の事実となつて仕舞ふ」とする解明的な行為の對象としないところに成立するのが「夢」というものの基本構造でもあらう。後になるが、『明暗』の津田が消子のいる温泉場に向かつた折の宿場の情景も、同趣の「夢」としてとらえられている。

もとより、『坑夫』においても「外界」が常にこのような形でたち現われるわけではない。ここでも、限られた「際どい中間に起つた心持ち」との断わりもある。とはいえ、このような心境が訪れるのは、基本的に主人公が状況に対する能動的な働きかけの契機を欠いているからである。この後にも「蒼い山の皮と、若い空の下層とが、双方で本分を忘れて、好い加減に他の領分を犯し合つてゐるで、眺める自分の眼にも、山と空の区画が判然しない」と景色のけじめがつかなくなつたり、「自分は雲に埋まつてゐる。残る三人も埋まつてゐる」と風景と人間とが融合して意識されたりしている。これは、いずれも、主人公の精神に積極的營為が欠如しているため、「自分の精神と同じ様に世界もほんやり」見えるのである。

さらには、死の予告からの衝撃も否定できない。「自滅」を標榜しながらも、いざ死の可能性を宣告されるとその深層で傷つき、かえつて生への無関心を装うのである。病院へ行きかけには「勿体ない程美しい色だと思つた」「蒲公英」を、帰りには「今見ると何ともない。何故之が美しかつたらう」といふがる。長屋から見下ろしている坑夫の顔も、「さつき迄はあれ程厭に見えた顔が丸で土細工の人の首の様に思はれる。醜くも、怖くも、憎らしくもない。たゞの顔である。日本一の美人の顔がたゞの顔である如く、坑夫の顔もたゞの顔である」と見なししている。引き続いて、「さう云ふ自分も骨と肉で出来たたゞの人間である。意味も何もない」という一文が加えられる。死という観念に立つとき、はじめて、

すべての人間が一視同仁「たゞの人間」として発見されるのは注目し得る。それは、生の「意味」がはぎ取られたからに他ならない。

ところで、「運命」という語もまた無性格論と結合している。「際限もなく深い」縦坑で「おい。まだ下りられるか」と案内役に問われたとき、「自分」は「初さんの顔色」をうかがう。

かう云ふ時の出処進退は、全く相手の思はく一つで極る。如何な馬鹿でも、如何な利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顔色で判断する方が早く片が附く。つまり自分の性格よりも周囲の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下落する場合である。平生築き上げたと自信してゐる性格が、滅茶苦茶に崩れる場合のうちで尤も顕著なる例である。——自分の無性格論は此処からも出てゐる。

無性格論の先に見た根拠は、人間の意識が絶えず変化するというところにあった。いわば内発的な契機である。それに対して、ここでは、「周囲の事情」の優位という外圧的な契機が語られている。性格は環境によって養成され、環境によって破壊される。つまり、恒常的な性格はないということになる。ここに用いられている「性格」は「人格」と同義語である。「自分」は坑夫行を「墮落」と考え、実際の坑夫にも嫌悪の念を向けている。これを作者の社会的正義観の未熟さに由来しているとする従来の批判は、全面的に正当とはいへまい。後にも詳しく述べるように、作者は、生活の低落が、人格の崩壊を招来する帰結を理論的にも実際的にも見せているのである。

つぎには、この作品の中核を担う「自然」と「運命」との二つ語が結びつくケースを検討しておこう。目指す飯場へようやく着いたと思うと、「赤毛布も小僧もふいと消えて」しまう。「是れでは小説にならない。然し世の中には纏まりさうで、纏らない、云はば出来損ひの小説めいた事が大分ある」という断わりに続いて、つぎの一節が来る。

小説になりさうで、丸で小説にならない所が、世間臭くなくつて好い心持だ。只に赤毛布ばかりぢやない。小僧もさうである。長藏さんもさうである。松原の茶店の神さんもさうである。もつと大きく云へば此一篇の「坑夫」そのものが矢張さうである。纏まりのつかない事実を事実の儘に記す丈である。小説の様に拵へたものぢやないから、小説の様に面白くない。其の代り小説よりも神秘的である。凡て運命が脚色した自然の事実は、人間の構想

で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。

ここでは、「運命」と「自然の事実」とが深いところで関わっている。これらは、「人間」の作為と対立し、それを圧倒するものとされる。「運命が脚色した自然の事実」の「無法則」性の主張も見逃せない。これは、「事実」の世界の強調であると同時に、固定的な類別や体系の否定を意味する。「性格」は固定的な予定概念であるから、これは、無性格論のもう一つの論拠を提示しているということになる。語り手作者は、さらに、「此一篇の『坑夫』そのもの」が、「事実」の世界に依拠していると、作品の手法を種明かししている。それは、ただちに「拵へたもの」としての「小説」の否定につながる。かえりみれば、無性格論の最初の提示例において、早くも「本当の事が小説家拵にかけるものぢやなし」という批判が加えられ、最終は「其の証拠には小説になつてゐないんでも分る」という椰揄の一文で結ばれている。作品全体としても、無性格論は「小説」の否定に帰結するものとして論じられていたのである。この点も十分に注視しておきたい。

四

それでは、ここで『坑夫』の世界の全体的な特色を確めると、どうなるか。

前作『眞美人草』に比して目に立つのは、先ず、「天」の用法の後退である。「天」が単独に用いられる例はわずか一例であり、しかも軽い比喩であった。「天」下「天性」「天命」「天職」「天佑」などの複合語も、絶対的規範になつてないばかりでなく、むしろ椰揄的・否定的な用法が多かった。「天」に依拠した『眞美人草』と違って、『坑夫』の「自滅」と「墮落」のモチーフは、いわば「天」に背くものであり、この規範の強調とは相容れないのも一つの原因であろう。

これに対して「自然」の用法は『坑夫』を継承しつつ、より強化されているということが出来る。用例数の増加もさることながら、特に、この作品の中心モチーフと深く結合していた現象が注目される。『眞美人草』の場合に超越的な傾向の強かったこの語が、「自然の事実」といった形で、自然状態としての事実の世界の凝視に重点移行していることも興味深い。

『眞美人草』における「運命」という語は、結びの甲野の日記等を例外とすれば、主として小野をめぐる使用され、アイロニカルな響きを持っている。これと違って、『坑夫』においては椰揄の調子は消えて、絶対的な重量感を備えている。もとより、通い合う面もないわけではない。『坑夫』においてこの語は、無

性格論ならびに「自分」の「自滅」の行程に結びついていた。『虞美人草』の小野について「只運命が暗い所に生へて居ると云ふそこで生えてゐる。只運命が朝な夕なに動けと云ふ。だから動いてゐる」(四)という叙述がある。状況任せの受動性という点で、『坑夫』の「自分」の無性格性と重なってくる。小野に関して「根のない」という比喩があるように「自分」にも「根が抜けて動き出した」という形容があり、両者に共通して「宿命論者」という規定すら見受けられる。いづれも、「運命」を絶対とする受動性・無性格性に帰結する。小野は、また「坑夫」の主人公が行き着く「坑の底」と通じているといわなくてはならない。とはいえ、小野は「一段毎に美しい浮世」へ上昇し、今は「絢爛」の世界に近づいている。「自分」は、逆に、恵まれた境遇を「出奔して坑夫に迄なり下がる」下降線上にある。同じ「運命」の語が、『坑夫』でより深刻に、より重々しく用いられているのは、この構造の相違に拠っているのである。

『坑夫』の位置づけに関して見逃せないものとしては、さらに小説論がある。『虞美人草』においては、「小説は是から始まる」という小説意識、「此作者は趣なき会話を嫌ふ」といった作者意識が、作中にも色濃く出ていた。これに対し『坑夫』において小説および小説家の否定がなされていることは、すでに確めた。それは、「性格」を「こしらへ」ものとするところに論拠を置いていた。

一人人間は、自分を四角張つた不変体の様に思ひ込み過ぎて困る様に思ふ。(中略)無暗に他人の不信とか不義とか変心とかを咎めて、万事万端向ふがわるい様に嘆き立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に印刷した心を睨んで、旗を掲げる人達である。御嬢さん、坊つちやん、学者、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り悪くつて、困るもんだ。

これは「正直」の旗を掲げた『坊つちやん』、「学者」の「領分」を主張した『野分』、そして「変心」をとがめた『虞美人草』への批判である。総じて、『虞美人草』にいたる初期作品の「人格」と「道義」という価値基準に対する根底的な自己批判が、『坑夫』において敢行されているのである。

中村真一郎氏の『意識の流れ』小説の伝統(「群像」昭二六・二二)の先駆という見解が現われて以来、『坑夫』はもっぱら「無意識世界探求の物語」として称揚されるようになった。題材の社会性に言及しても、結局は「社会的なつながりのうえで、とらえられていない」(玉井敬之『坑夫』小論)、「帝塚山学院短期大学研究年報」昭五五・一二)、「社会小説的意識から構想したという考え方」

は「かならずしも正しくない」(佐々木充「漱石『坑夫』試論——坑道と梯子」：「日本近代文学」昭四六・五)として、それぞれ「内的世界を展こうとしたその実験的な意味」「無意識関」に漱石は注目している」という題材との乖離、『夢十夜』に連接する深層心理への屈折が強調されている。

けれども、『二百十日』論でふれたように、漱石は、明治四十年をピークとする足尾銅山鉱毒事件を十分に意識し、社会主義文学の動向にも深い関心を寄せていた。このような作者のありようと『坑夫』とが無縁であるはずがない。のみならず、「動機の解剖」というこの作品の狙いと題材とは決して矛盾するものではない。深層心理の追求と坑道を下降する行為とがよく響き合っていることについては、あらためて念を押すまでもない。これに本稿の分析結果を加えれば、それは、「性格」||「人格」||「道義」の解体とも合致している。鉱山は、ただに「身分」が下がるから嫌悪すべきものでもなく、限りなく「死」に近づくから恐ろしいでもない。それは「性格」を荒廃させ、「人格」「道義」を崩壊に導くから畏怖すべきものである。

もとより、作中には「自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の小説と見立て、それから自分で此の小説の中を縦横に飛び廻つて、大いに苦がつたり又大いに悲しがつたりして、さうして同時に自分の惨状を局外から自分と観察して、どうも詩的だ杯と感心することへの揶揄が見られる。これは文学とりわけ自然主義文学に対する批判だが、あるいは社会主義小説に対するそれが含まれている可能性もある。いずれにせよ、このような批判を持つ作者は、「道義」の解体を傍観して悦ぶところにとどまっていられなかった。そこに、結末における「安さん」の登場がある。暗い「坑の中」において、彼はなお「教育」を持ち、「教育から生ずる」「上品な感情」「見識」「熱誠」を維持していた。「自分」は「此の尊敬すべき安さん」の「人格」に対して「こちらの人格」をふたたび高めようとする。

「日の照らない坑の底」でも崩壊しない「人格」の存在が確認されたのである。作品の末尾におけるこのような「人格」の再提示に関しては、多くの非難が集まっている。「此の人に逢つたのは全くの小説である」という語句があるからには、作者にもこの唐突さが意識されていたと見なくてはなるまい。けれども、これを作者の不徹底としてのみ片付けるのは一面的に過ぎる。なぜなら、『坑夫』の理論的支柱となった「創作家の態度」において、「真」のみをあつつけて「人格」「人間」の一切を斥ければ、結局「人間の自由意志を否定」することになるという必然を作者自身が明らかにしているからである。

「人間の正体を事実なりに「凝視した時、どのような対応をするか。既成の「道義」が崩壊した後、いかなる形で「道徳」が再建できるのか。この問題の本格的な追求は、『三四郎』『それから』以降に委ねられるのである。